

海外旅行に地図帳を —中国・北朝鮮への旅—

東京都江東区立深川第八中学校 園田満三



1 はじめに

2002年夏、全中社研海外研修で中国・北朝鮮へ8日間、10名の参加者とともに旅をした。二つの国は日本の隣国で、気候も似ており、歴史的・文化的にも深いつながりがある。海外旅行に出る前の1番の関心事は自分の行く国（地域、都市）はどんなところか、治安はよいかということである。中国・北朝鮮の情報を集めるために、新聞記事や旅行会社のしおり、市販の旅行案内等を手に入れた。また両国の大きな特色は帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』（以下、地図帳）からつかんだ。

地図帳（「世界の気候」「東アジア」「朝鮮半島」「統計資料」）から、わかること

- ・日本・中国・北朝鮮は、ほぼ同緯度にある。
- ・気候は温帯、亜寒帯にあり、ほぼ共通している。
- ・日本と北朝鮮は大部分が温帯林に被われている。
- ・中国の華北は広大な畑作地帯が広がる。
- ・北京市・平壤市・秋田市は北緯40度にある。
- ・日本との時差は1時間である。
- ・中国の人口は約13億人、面積は日本の約25倍。
- ・北朝鮮の人口は約2300万人、面積は日本の1/3。



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.14

2 地図帳の携帯は役に立つ

初日

午前11時に成田空港から離陸。座席が中央部のため、眼下の景色はわからない。航空会社のパンフレットで飛行コースを確かめながら、地図帳を開けて情景を想像する。

約4時間で北京空港に到着（東京から約2500km）。中国人ガイドT氏が迎えてくれた。高速道路に入ると、20～30分で北京市内に着く。市内でまず目につくのは自動車、人、自転車の多いこと。

中国は開放政策になってから、周囲のたくさんの人口が北京市内に入り、現在でも増加している。北京市は、2008年のオリンピック開催地になり、道路工事をはじめ、高層マンション、スポーツ施設等の建設ラッシュ。歴史的な建物は次々に取り壊されている。

この日の気温は30℃、だが、湿度が低いのでからっとしている。ホテルに到着してから、北京地下鉄に乗ってみた。料金は2元（約30円）。車両は日本でいうと一昔前の型。北京駅に着くと、ものすごい雨が降っていた。外に出られず、ホテルに戻った。



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.15

第2日

午前中は故宮博物院（紫禁城）を見学した。清朝時代の皇帝の住まいで、敷地は約72万km²。太和殿前の広場では毎朝1万人の宦官が皇帝に挨拶をしたという。満州皇帝溥儀の映画「ラストエンペラー」のシーンを思い出した。

昼食は広東料理を食べた。さっぱりしていて食べやすい。夕食は四川料理、こちらはやや辛いが、おいしかった。地図帳の「おんな家庭料理」を見て、本場の中華料理に大いに関心が高まった。

第3日

早起きして、近くの公園に行った。中高年の人たちが太極拳、剣舞、気功などを行っていた。その数、百人以上。しかし、若い人々は太極拳等あまりやらないそうである。近くにすわっていた老人に、日本の地図帳を見せた。東京のことを伝えたかったが、うまくいかなかった。

午前中、いよいよ北京空港から平壤に向かう。2時間半程で到着。かつてのよど号事件の舞台になったところだ。入国手続きと検査は厳しかった。朝鮮旅行社のマイクロバスで出発。現地ガイド2名がつく。原則的に写真、ビデオは許可された。平壤空港から高速道路を通り、一般道路に入ると、道路の両側は広い畑作地帯。初めて見る北朝鮮の人々。荷物を頭上に乗せた女性。協同で作業する人々。荷車をひく牛。地図帳からも畑作地帯が多い



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.17～18

ことがわかる。

40分ほどすると、平壤市内に入った。労働者用の高層住宅（10F～20F）が並ぶ。町の人々の服装は、色や柄が地味で、女性でもピンクや黄色はほとんどない。男性は黒色か茶色系が多い。人々の表情は明るさがなく、浅黒く、皆痩せている。軍人もよく見かける。キビキビして元気のよいのは、交通整理の女性警官。信号機がない交差点で、機械のように指示を出していた。

私たちの最初の訪問先は、人民学校（小学校1年～4年）。民族衣装を着た女性校長が玄関で迎えてくれた。玄関の正面には、金日成と金正日父子（以下、父子）の大きな壁画があった。夏休み中のため、児童はほとんどいない。普通教室、自然科学室、パソコン室、革命資料室、プール、体育館等を案内してくれた。どの教室にも必ず正面に父子の写真が掲示してあった。舞台ホールにも案内された。ここでは、突然20名くらいの児童達の演奏が始まった。ギター、エレクトーン、ドラム、アコーディオン等、身体全体でリズムを取り、笑顔で力強い。合唱、踊りを含め約40分。この後、この児童たちに見送られて、人民学校を去った。

第4日

早朝、平壤市内はかなり深い霧。大同江中流の中州に宿舎のホテルがある。地図帳で大同江の流れを見る。ゆっくりとした流れのようだ。ホテル内は節電のため照明が暗い。朝食は、ホテル内レストランでおかゆ、肉が少し、キムチ、揚げパン等。飲み物は水。お茶は飲まない習慣という。9時ごろには霧がすっかり晴れた。34階から眺める市内は、山々に囲まれ、チュチェ塔や三角ホテル、高層住宅等とのバランスがとれ、絵のように美しい。

午前中、高句麗時代に豊臣秀吉の侵略を受けた平壤城大同門を見学。そこに、ちょうど宿泊行事に出発する中学生たちが集まっていた。どの国の子どもたちも元気な姿は変わらない。

北朝鮮の義務教育は11年間で、幼稚園は1年間、人民学校は4年間、高等中学（中学校）は6年間。17歳で卒業し、大学に進学するか、軍隊に入るといふ。夜はアリラン祭を見学した。北朝鮮最大の伝統的な行事で、会場は約15万人が収容できるスタジアム。フィールドでは踊り、演技、空中サー

カス、行進。名物のマ스ゲームは平壤市内の8割の高等中学生が参加しているという。この日は最終日ということもあり、たいへんな熱気であった。



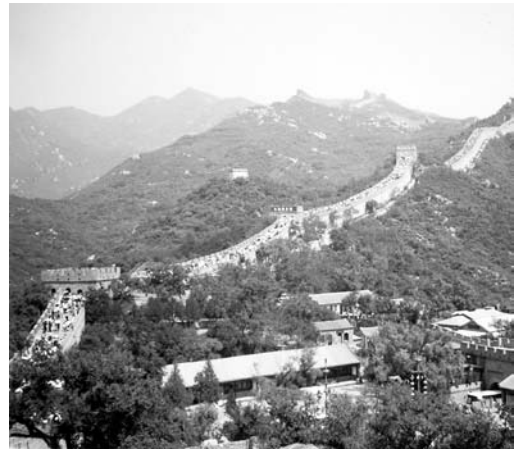
北朝鮮の子どもたち

第5日

午前中は万景台の金日成の生家を訪れた。美しい公園の中にあり、見学者が多かった。午後は、学生少年宮殿を訪問した。北朝鮮では午前中で学校は終わり、午後はここで学ぶ。空手、書道、パソコン、テコンドー、琴、ピアノ、アコーディオン等を勉強している。北朝鮮の人々の月収は、職種によって異なるが、2000~3000W（1W=0.8円）という。地下鉄にも乗ってみた。かなり深いところにある駅は、ホームの幅が20mほどもあった。車両にも父子の写真が掲示してあった。

第6日

平壤から板門店に向かう(約200km)。高速道路を南へ向かう。地図帳を開き、道を確認する。途中、開城を通った。代表的工業都市だが、工場に煙りがなかった。平壤から約3時間後、非武装地帯に着いた。ここで兵士2人が乗り、軍事境界線に向かった。緊張が高まる。軍事境界線では、勲章をつけた精悍な軍高官が迎えてくれた。板門閣テラスに案内された。軍事境界線が見える。この後、境界線をまたがる軍事停戦委員会管理棟に入った。1991年以降、この建物内では南北会談が中断しているという。南北朝鮮問題



万里の長城

の解決には、まだ相当な時間がかかりそうである。

第7日

午前中、北朝鮮を離れ、北京空港へ戻った。中国人ガイドT氏と再会し、この日は万里の長城へ向かった。高速道路に入り、約1時間。遠方に万里の長城が見えてきた。春秋・戦国時代から人力だけで作った城壁。明の時代には約6700kmもあったという（日本列島は約3000km）。地図帳で見てもすごい長さである。城壁を歩きながら眺める雄大な長城の光景は実にすばらしかった。

第8日（最終日）

朝食後に、天安門広場に向かった。たいへん広いのに驚いた。1999年の中国共産党50周年以降、軍事パレードは建国記念日のみになったという。ここは、休日にはたくさんの家族づれでにぎわう。家族で来ていた男性に、話しかけた。コワントン、スーチョワンなどの地図帳の地名標記がなんとか通じた。隣接の記念堂には毛沢東の遺体が永久保存されていて、毎日1万人以上の人々が参拝するという。この日の午後、充実した8日間の旅を終えて、無事日本に帰国した。

3 おわりに

海外旅行に地図帳を携帯するのは欠かせない。現地ではその国の地形図を使いたいが、日本語で書かれたものはない。地図帳を参考にして、現地の町を自分の足で歩き、目で見つけた新しい情報を書き込むことで、自分なりの地図帳を作り上げることも、旅の楽しみといえよう。